

故郷のひまわり

王^{おう}

明理^{めいり}

● 理事

台湾独立建国聯盟日本本部委員長



昨二〇一四年三月に台湾で起きた「ひまわり学生運動」のとき、勇気と行動力と知性を兼ね備え、仲間との信頼関係で結ばれている若者たちの姿に、心から感動した。それは、若者たちの中に、これほどまでに台湾人アイデンティティーがしっかり根付いていたのか、という驚きでもあった。

このときに書いた詩や父に関する詩をまとめて、今年の三月三十日に台湾の玉山社から詩集『故郷のひまわり』を上梓した。日本語原文に中国語と台湾語の訳を併記する形を採ったのが、特徴である。

両親の故郷台湾に、私は二〇〇〇年の陳水扁總統就任式のときまで行ったことがなかった。

父、王育徳^{おういくとく}は台湾独立運動をしていたためにブックリストに載せられて帰国できなかったし、

「台湾が独立するまでは帰らない」という母親の矜持もあったからである。日本で生まれ育った私の一番身近な故郷は、この日本である。しかし、幼い頃から自分は台湾人だと自覚していた。

父は二十五歳で日本に亡命し六十一歳でこの世を去るまで、一日として台湾のことを考えない日はなく、台湾人の国家誕生のために生涯を捧げた。父が亡くなったのは、一九八五年。だから残念なことに、父は民進黨の誕生も、李登輝先生の總統就任も、陳水扁總統の誕生も見ることができなかった。しかし、父が願っていたとおり、踏みつけられた固い台湾の土から、ある時々、奇跡的に種が芽吹く時があり、台湾の希望をつないできたのだ。

今の台湾は、国民党の一元独裁体制から解放されたものの、今度は「台湾併呑」を主張する

外敵、中共と真剣に向き合わなければならぬ状態に置かれている。中国は二千発のミサイルを配備し、台湾が独立すると言ったら軍事力を行使すると「反国家分裂法（二〇〇五年）」を作つて脅迫している。その上で「以商開政」（経済を使つて政治を追い込む）「以民逼官」（民間を使つて政府に圧力をかけさせる―これは民進党時代）政策をとり、経済による中台統一作戦を取ってきた。これに呼应し手伝ってきたのが、馬英九である。つまり、台湾人は内に中国国民党、外に中国共産党という敵を抱えている。

正義はどこにあるのか。それは台湾人にある。台湾は歴史上も国際法上も中国のものではない。しかし、巨大国家の前に正義は踏みにじられ、台湾民族は滅ぶ運命にあるのか。そうあつてはならない、という台湾人の抵抗が「ひまわり学生運動」であつた。サービス貿易協定の国会審議が三十秒で打ち切られるという非民主的手段に反対する形で始められた運動だが、根底から若者を突き動かしたのは、このままでは、台湾が中国に呑み込まれてしまうという危機感であつた。

三週間の活動のなかで、学生たちは日々成長していったように思う。そして、自分たちの主張を伝えていく過程で「台湾の将来は自分たちで守る」「私は台湾独立を支持します」そう堂々と述べるに至つた。

この若者たちの行動は大人を覚醒したことに大きな意味がある。それが、昨年十一月の統一地方選挙の結果となつた。中国国民党の惨敗は「中国との統一反対」という住民の意思表示であつた。「台湾は主権独立国家として国際社会に正常に存在したいのだ」と声をあげても、中国はあらゆる手段で妨害してくるだろう。それでも、声をあげなければ、何も始まらない。ひまわり学生運動の後も、若者たちは様々な方法で運動を続けている。

台湾の土には、日本人の努力もしみこんでいる。目には見えないが、日本精神は世代を超えて、花を咲かせる土地の滋養となつている。台湾に一面のひまわりが咲く日は、日本にとつても明るい日となるはずである。日本の応援を台湾は待っている。